

# 私たちは自分が何をしているかを知らない

高井寛

(東京大学)

ハイデガー『存在と時間』によれば、私たちは日常的には「世界へと没入している」。この独特な表現が意味することから、すなわち「没入」概念に正確な解釈を与えるのが、本発表の目的である。

本発表のこの課題は、テキスト解釈上のいくつかの動機を有する。まず、この「没入」概念が導入される「周囲世界分析」 (§ 15~18) の解釈に対する寄与がある。周囲世界分析においてハイデガーが展開した行為の哲学の全体像を正しく掴むためには、正確な「没入」概念の解釈が必要となる。次に、ハイデガーは「没入」という事象についての最終的な説明を〈ひと [das Man]〉を巡る議論において展開したと明示的に述べているから、本発表の課題は、〈ひと〉とは何かという『存在と時間』解釈上の重要な問題にも関わっている。そして言うまでもなく、〈ひと〉としての自己からの変様として「本来的なありかた」は説明されているから、本発表の課題は「本来的なありかた／非本来的なありかた」の区別という、『存在と時間』解釈史における最も論争的な課題のひとつにも通じている。そして最後に、既存の(多くの)解釈は「没入」概念を適切に解釈することに成功していない。以上の諸事情が、本発表が「没入」概念の解釈に取り組む動機を形成する。

本発表は以下のように進む。まずは「没入」概念が最初に導入された周囲世界分析を読み解き、その概念が表示する事態についての手がかりを得る。この際、当該概念についてのドレイファスの解釈を参照し、ドレイファスが捉え損ねた事態にこそ「没入」概念の眼目が掛かっていることを示す。次に、ハイデガーが「没入」という事象についての説明を与えると明示的に述べた〈ひと〉についての議論を必要な範囲で読解し、周囲世界分析で導入された「没入」概念の眼目がどこにかかっているのかを確認する。続いて、本発表の解釈に従うことによって(のみ)解釈上の解決が与えられると思われるいくつかの箇所を『存在と時間』から拾い上げ、本発表の解釈を側面から補強する。最後に、本発表が示した「没入」解釈が正しかった場合に『存在と時間』の全体がいかに解釈されうるのかを、「本来的なありかた」に与えられたいくつかの規定を通して確認する。ただし最後の作業については簡単な示唆にとどまる。以上が、本発表の概要である。